諸用文章
2823

S833

百乙番
か

序

友人何某正月二日乃物夢見
可福助ゝ夢ゝ吊ゝ其圓夢を
問夫頼朝公以来大矢窓を以て
名さる者獨福助ゝ也嗚呼
夢ゝ吉也中さび大黒ゝ摘麿を

饗庭文庫
2823
へ13
2823
旧逓
2132
8

ゆくゆく雑すてい侍女布代長和尚が
お茶を坊主福録寿ゆ團扇をかの紙
ゆせ寿老人なお杖持見世へ夫ゆ
打仙世毘沙門天な金の番旦那様
門果報樂隠居ゆく即時一寸見を
如斯　このひておゆ様方の御慰

張と共達磨を迎ゆて福助首へ
如何すと振鷺亭主人元方ゆ
向て井花水に筆を濡を

樓五代
青陽

枕上片時
春夢中
行盡江南
数千里

岑參

西行

春くれてとしの暮ぬ
おもひ寝の
まくらくさくさ
叶ふもの夢

叶子宝眼画

福是ゝ人百有一元
毎年多ゝ要ゝ家門
一生生綿ゝ子孫長
年充ゝこの成仰可求

可福助畧縁記

此度同向陸におゐて可福助神の開帳あり
迚両国迄ハ振ひいふも実なり糸竹歌舞の
其中に四条者親子連にて伝馬地下ゐの
見物ゆ事門者一人ハ笠ゝ長籠屋ゝ
て来る一人ハ笠もなく傘ゝ長ぬ親仁一人ハ懇の
酒そうなる婆婆一人ハ花嫁もそる濃赤縮
乃活衣ゝ乃張四極笠ゝ黄赤縮ゝ帯

はをまこるいよるかぜ見へ見へ紙つきこのて蛭や
釜ふ塩はをてる泥の素ふに業師殿殿たき
たんくたたこのろ田こる点ちつぷり村一点の
むたやらく風ぬり一人い檀那寺れ和尚ふろく
乃坪花の扇子むざ一直匂雑ら点く「りの
寝いあんとふ処ざ「こいやぢん堀乃不動
さ夏でどぢりやす景ろふくぐ山ついされ絵へ
くくおまづゆく音へろはいてもぐ絵へふよ

たかまさりやたよトのあへ人いあんありやのたりにつぬ
ふまかふ板がいざこ半一目を白黒「ヤレそあまる金弟り
してくすむ山大きよ弟くこまげる
またよアレサヤ紙太鼓をぶつていくげよ猪
中スたりとふりあ
あぎてよこう板ぐつぐぢりくへつくるぢりやス
こるぬハヤこまいこんざ戻りますべいよ「ぬ
様義の無乃ごんぢいねぎそなるくたのんとす
べい「十二たあら紙さい二八面毛乃茶でなな

なるべュるさ「十二月」あるいは安西のうるうまごのた
ゆきさうたこゆくとュるよ蒙とぶるう緩
ふりつ〳〵念仏者なごあひむ世へ「モノ」
佳くく未度の実数乃ゝ川は長命花
と者板のうゝてあるが薬屋ぐがな
あるべュ「いつさい」黒焼け薬なゝちん
でとありやすくたゝやきの黒焼あくびの
黒焼血乃ゝちゐ宣れ黒焼ぶ麦粉さ

「古命ねとゝふいおんの薬さあぶ「長いきの姫
やくサちゐいさんでおさん「色ゝうて長いきをする
黒へれゝ黒ひゝふへ晩よ天の寝る時よ色
〳〵やろう「モノ」越〳〵べ一色ゝ〳〵孫歳や
ちやゝの代といき延ますだへ「そん子薬と
のんでつゝ〳〵ゝてゝ長いき能ゝ
だ「ヨ」〳〵らあもとの当れ黒焼とやぶと
のんで血乃のふぶつとめまとべいト親ゝくとを

「おちよさまおいそがせ命ぜられ樹ふ物たべ先ゑ程合
ねといふがゆるサあく」おいびなせ「やゆ」げるつり
頼集〜中ス「うつさまげゆ中「とてゞおめ方ゞゐさ
ゞる両国さまさ河巻道ゞつ〜ゞ里と水茶屋サ
茶でものさゆゞ〜びきまあ張なゆ処とゐなせ〜お
「よめんゆよ買てきた菓さおのませさくおん
ぎやるゞ獨ゞとぶちゞまゆ〜茶代をひつさく
らゞ〜だ〜ゞ〜ゞ〜ゞ一つ。いゆゞゞて菓ゞゞん

のまゞ〜中ゞゞ〜〇くゞゞてひゆゞといたゞゆる
汐鶴水「ゐでも一つ。い一ゞゞよ「ことゆゞあ
ゐと腹ゐる村角生中ちゆお店屋ゞ寄
接合りのゞおよ「モノ左処てゆ山河の清水
なゞどゆのゞ清見ゞおゞにさてゞく高処ゆきゞ
ゞつな処ゞトおゆゞゞとゐゆ一ゞ生てゐゞをゞひて「ゞゆト
まつゞゞ消ゞゐゞおゞゆゐのゞ里ゞ「ゞ
るりのゞ代ゞ焼ゆゞとゞゞゞゞゞゞゞゞ

ふりかけるよあいはせだくさんをてゐやぐろ行灯の「あんと
車へれくゐ」されてくのさくろ出たれねことのふらてゐる「あんと
あひさんしん持へどふざ「あんざうざうせあかう
あをぶちうまーとるふとろくらくしてあ
ぢいな家たのへよあり中たよ「きめうりく
①ハあの南京操いらちいく今ゑ虎
猫去実持たどまつさのハまあまハれく
ぞうるふこちるめら
どんちんの青にびつて「ヤレたあおとこいこんざ
又血たさあつんぐべへサりくつぴりゆう

とうトせくこうこの矢播そドレ「おちうあすん
ヲりリンの青ふみひろて
ぐふ射ろうさまへいとあ車さよ「モノ公弓矢知
まあ栗山るへんつきいあさ〜見事でよらん
だい〇雷歌じやくいあどりくかんあり
けいあぞうハ色じやせうの物とせうでお用よ
うけまとトあ戸嘉太ちまきゆて「家ちがひ
ざんだいとだへよらつーるななたもあ
小盃の中でうなろ中ハ象猪ぶんだへ

田畑をおしてゐるゆへ猫へ
いゝ事ゝ出づゝと謡宝をさんざーてゝ物
のするとゝぐつけのだぶうだ○さきぐ
ひゆうだんよあづうます狸娘へとれで
ぐざうまする処へ信気更級姥捨山猫
へ猿平ぶむをめ年へ十し親のいんぐ
るよむくひこはろしろ狐の毒うかう
なかうるる者に生まれ〜さうるへ岩根

見ゝるゝいん猫は文の縁へは門は宮の縁
へおゆうんだんよ儲なゝ二つ生や娘よとき
見れ方よくお見ようあろ「やゝくもあ
長ちけねへ七色」夢中て寝ぶあつこぶ生中
すよ「さんげの志あさる明礼娘の親さちだ
んべいよむぐちあねへみをりろ寄りゆさの
げるよ行そそ面ゆ中しろ泥めをうゝ
見迷べ孫姫夜のせなあがよめんぶよいき

うゝだあきこ「ゆう」ゆうゝまぐゝ十念のさぐ
あゆとうあむなのぞぶつく「ノヨでつち
なつく蔑小盆のうけてあるぐあんざんだいあ
「あぢよな○さきぐれひゆゝだんの玉や
ときん今ぐてうぐ一ぬ行紙ようゆいの巻
ぢれうんぢんく「コレおめく方い麦とつい
ぢう簾乃米をゆなつゝうて重業ゝたろふ
ぐ煙業へゝゝ米ゆるめく遠入ってうゆ

ゝそんなあぶぐゝのものを見ゆ米とゝ血た
ぐぞこつきゆとふをれうゝうゝはいねちと
乃目おきさちぐれ義ぢまこく三絵のひねて面ス
を愛なさろ○タぎうあこだりるとゝはゝら
みら米さうかろのゝ悲れなつゝひといひな
ぐゝと迎ゝうゝきゝなあろあさぎ「あるぐ
ゝとこづ面深てゝもイヨおらろのめ「コレぢあ
きんうゝ迎なさんあ外ゝうゝかめると帰迎る

うゝ用へたゝって体かゝゝ一服浸れば薬代十
ゆゝくゆあれひゝ身さとこで色をたさいろ
とゝのさ「左処でいい物皇よ茶釜をつ
うけてどんくと替て体いとのゝどよ茶と
のゝ小身おさゝくゝ嬉しの浸おきとーゆス
さおくいぎまとべいよ「結このとゝあげ出を
の色ゝゝ度小語のう色いりの見世をまんとを
ゝさゝゝ○おうけおさいお体ゝなさいあゝ

めんゝなひやどうあんな○大西瓜く
なゆ出く○かゆゝはやりくとおみぎき
なきるとさんちうても赤ゞ孫でも代魚り
即金よ銀となるじやまいてうこてりとよ
おいておゆゆいまするはゝがかんだんゝる
ぶさゝうと千金万金の出ますとる事なゝべ
ごさおんごふんゞ川もどざろうゞ薬代ゞ
色でほゝ日ゝう風おのちりぢやコリヤとと

お茶宮が抱みぎきなさるて、座敷でゐ
よいおなぐさまおと会のうちにはをんなよ
へなへきせるをもち出しなさいかうらくゐみ
ざいてあまりまと（りうらくと出てよめごとをさしさる
みぐいてのふひそくざに根（たまらうの赤ぐるみのきせるを出し
をーとあのさるふきもをつぼ「こうまでアあひかく
きせるふなうゆて、いたやあのくそうさふい
がうのふひ光（ひろ）ヤおれなうるひてきますい
トうさうハクロ（ぎょうとうさと）○とうの仮とーきたてく

○あげさておみぎよおそしなさい「モノ（ものう）
矢麩（ぷら）羅とうんどんのうつてあつ油揚（あぶらあげ）のふ
な白ひじゆを「てんぷら（たてあ）ときよむづと
いうねてどうゆーす「モノ（たてあ）和尚さまたしう
ヨーかのおんぎいの戒名（かいめう）へてんぷ（んど）信士と
ろうたまさきぎ（ぎ）ねへ「ヨロ（おきあう）も
是ゆーさねへ戒名（かいめう）をうちヨすさ（なむ）ふ南無
おんどへくとおぐんでも同ド事でござる

「こんにゃ大日ゑひちゑんく おさてのうさんもさ
ろちやあ仁王さまのぐちんとうでどざりやす
が神仏の門でも仁王をおがむわいあむあぐ
ぶつとうもようそうなうなむ仁王さんと
いふとちゑがなしあんとのつくおがむがよ
うろうね「仁王の云ぐおんどざる「なん
と」「おんはらまつふおんつよそうよ
あうちとうちとうふんどさうそとか「と

いいいあぐさい○本はうちはさらさちは
なうとうちは○阪まりた細見の絵屋○
商卦本卦けうらかさおかおかのうんぐ
あるいい共物 往人商用 善なくれうふひ
「モノ玉ふ 焼とかひてどざるがさてくせり
ちとうなとんざ「とのおちるさあへ置もせぬく
せよいろいなりのをとのんでへちゑしなさる
いぢのきたねく「玉ふうてい仁角三角

でござらあぶ〻ら〻ちのざんべい「玉ゐ
でなくへ一ッ買ッておもちるさまくあまなくどく
ふあるぜ「玉ゐなるこゝ〻ろ」たの義ゐやあ
鳥ざあれ書だなのといろくな玉ゐうぬ
んざんよごさゝあ「玉ゐの燒さのゞござゝあ
晴日よ月ゞ生ゝ奥今でハなる夜でまるゐ
かぢゐ生ゝよ○外ん山乱く○舟渡
意竹推実ゐく一ふくろゞぼゝ「ぬんなゞ

所塔場のしろ山ふハ推のまゝけゞく
厩をとくゝちハも一俵や二俵ハひろハやに
「小姐ゐろでハ文とハイやとやおゐうねく相
惕ゞ「イヤとやとんゞゐゞゐりのまゐて
きハ○ゆふお目よゐけまするゞ嵩ふ夜
玉れゝ書きでござります正面なすなゐち
夜玉稿たゝのもさハく九十六冥むゐゐ
見へまするゞをとゐうぬん稿れこなゝハ廣

こうじ足世物茶屋せのてい右へ本処一ツ目
のと柳橋大もしこゝ三ツまち永代を限りて
見へ土のそまろくさたちへ小本所弱心橋ちい
のゝ三圍しのぐぜん角田川のちゑをさん
たゞ寄ゆへ新ゑ花こうあり三囲てまへ
乃ゝ見へ押橋おくらまへおむまやぐの渡
おしさぐまして川中へさし出まりこゝ出
びれ寄まよりこゝ陵ゝ雷行町花川戸

清州ゑんぜおんよへ五重の塔まつちやゑ
今戸橋ふハさんやゑのりとまたさて色
よりへ土俵ゑのけいちゑくゝすぐこゝてい
ぞぞう庵そるよりのえびを花を外あまる
れ盛うれ新ゆへれいとゑゝせん上ゑりこゝ
いろ森田さんのてい茶屋くのたんぞう
ちゑうちん一度よゆへをてんじまりてゑをよへ
月星ゑ寄ゑゝ見れ玉やかぎやいさゑふ

ふとゝ見うれまゝてゐるそうせいゐゆへ心ぐう
とうの花ゆへをあぞゆまゝる細工とゐぎゐ
ふお因ゞとゐりまゝすゑべせんぐさゐいお
かとうゝ「サヲ」ゑゞが面ゐ物ゞおめぐる
土の比やゐ者の比を渡るとちぐうふよ
三度いでゐてゐさんゐ並へそてもゞあて
ゐとるゆいまん中の言い処をふきちゞさゐ
ゐうのよむこふをゐとるゐだうゐうするとうき

のあさゐるよりゐゐ○南亜めうかう
ゐんげきゐう〳〵○未でゐう称てゝと耳
撥が一文「よめ」ゐうさまな安いゆんゞ氏耳
くゞりがうを一本かうて八遠世へ氏月ゞ
ふゝ中す「ゐゐ」二本で一文よまゐさ月
ちやろ「うて」ゐ事称いねへるふ一話ろうて
まゝうゝれへ「ヲヤ」るふちゞ屋のよふさのモシ
「うなゝうゝ」ゐく賞なせい耳撥へ主け

たよ「まあ」よりう孫の方うだよるめいてよふ
こざり中ス「同じ」ぞでいちふてら
つとへのを撰ざ丈へ「よくぐへいぞんもねく」
のうみくうきな丈さん「アイサこよくまちたう」
ふづが出やそ「こめへみうきをとろてつむりよ」さし銀の箱ばをろうきとろう「おな」
見せへ大ざいこをぶ川さいて来中たがあん
ざな「おんない」すのうのたへこさ又姫ふねべ
のぐ「おちうう」モノあめの姫るのをたいとでさうふせ

ふ虎たるとへ拝ふく川南地へ川てい
紙へな処ざ○たなうーうあきく○
たなうーう姫○さんぞくこんたうう
おうう「おじ」ぞふおんどいこんどう
ざう」大山大たうう姫ぎう明王なむき
めうてうらい「ア」ぢたお河へぶうたぞま
いうく白てさうを特ぞうぞ動宝あいが
ちづうさうて大きな刻ぐとあり

中を家はぐくなんぞ○歌かとうま
ちりいのぞくゆおつとうまくくとゝくども
名よあつ処の大剛乃勇士ふきり立
ら是秋の赤はぎ葉のちるぞくとうぞひ
なんがくよゆぎもちろう「アとくげのよ
いきをだつて夢のふきり中が侠義
とうな強撞な事でおんどゆる「リ」
撞のあうぎ是だころ蛾あくおめく方へきろ

つ毋すとちりとトが見てなるきりはせく
紙人魚ゞいつくらるもたくてゆるよ○きゞぐ
ひとゆうだんの女曲るいこれどやくく○
おゝまなさいくゝ毒園名物よ彩まん
ちぢう絵とさとう脇く○山八ゆく
「サア猪見」な芝が毒出れ名物サたち
蛾と脇でるさろまいもでも一盃ぞ出ごん
ねへ何のとむ食そうぞやあ祝くゝ「モノよあん

きつよおものきやあ新蒙よりろく時江戸
沙鍋乃だとく〳〵脳をゐん出されて出づゝ
つゝたきろつゞだやあねへこのまゐんべい喰ひ
つ事ねへ物よりいきろまいものでろひのを
一本ゞ矢蒙ゆかうだるゞよふごゞ
る「清水屋の蒙ろふいつこちたと
おゐ〳〵く一山ゞおごろまゝすだいトろまいも
と賣て居くかうだろうあるて内「このさんまいもサ
よとくロつゝてあく

をゞきろてゐゆ中ス世いゐ鍋がつゝたつて又
血乃だがきやきゞでろゞゞゆた「もきなゐ事を
乃を拵すゞ血乃もをさまゞいひゞいの
ゞすきたらゐかゞるのゞろうそれゐへい
妙な薬ゐきゐるゐちゝきなゐ医舎で見お
五ゐ里も山ゞゞたるをひゐてむゐひよゆ
のねゝきれバかゐ紙ゞ九南地ハつゐ
くきやこをゝてゝとゝきりゞ習きゐろ

あんとあるごとく処ざろう○こうだいぜん
白ひ蔦みがきは中一切の如やく「ぜん
ていよあごこ毒の位指病いふぜんはうふた
へるとあるとれよへ氏は中一切れこうを
一はのむとこどこ病るなどる「トたとみがきをう
まるよめへ一になるて「見いたもの書こ家の言
大きゐむせてあこごをなど」
いくこうさあて固合りの一はよへあいゆ中さ
ねへたとへ出まくおくうさざり中たりの一はも

のまれ中さ稀へ「こうしなるめる言まよ
なるべきこいい事へいねへよおめへおいくた
だると死ぬるよ死ぬと人命ゝ稀へよ
命がねへとあんまも稀へ「なんまもあへ
てと息さへあるへふござる「はへくそん
なゝ氏務手すりかとておいて氏揚枝を
一本おめてよを拍よをるゝ見ておめへ
蔦をみがいて見なそのはのくさい白ひを

さるが始ごよ「はつ」へ後の白ひをさり
とふござる「たちあい」白ふとござ芝めがちるまう
馬焼ひやふさんまいもとみきころいぬ
なにちそうだなんどのちやと食物の
こそうがありそうなりれざヨハト、こつちら
そつちへ白くとこ泊へつたべる○且那大
二階「かい」この日宴なるちや「おうち」黄地へまろつて
うゝ茶の「め」服だろうて後あいがさんこ五申ま

奉服なとをとつさら姫つこれ申そう○
おごさそうゝ一ゝ世芸下さり陸せう○めく
めこらしてよなこるこさそうこさそうとおか
さを〳〵○アおを乗り下「くだ」向けさんあさ馬や
にちんの乗りおなひませぬかなとなりの
まへなおなのとだろうてさすりまする
○こふだこの「あの」階ノ〳〵○名代丁る焼く〳〵
「あんない」サヲ色がむう〳〵十百八多両金を「ふく」握れこ

お寺さ〇ゑへろんてんぢそんどの要
脇毎のうさぎの釈迦如来南無阿弥陀
ろぢ屏風はれ帳ろうぢ屏ろうだんよりの
りまして御ようへまいられる御書院へ
たんごりの地へ和子そうあるいはお姫子手
そういまぢぢんとんしおきかもあるひてか
なりぬるべとりくごさいくむれ字とう
の字もアイ〜ふ別のもの絵もぶもの一ツ

時ろせいが夏も葉のつきこて一ッ時のろい
ぐりんちとせとのぬるがんもたこもうねべ
そのあぢりいが生りぬどう里まつれ山
ちのうりよりくなるとうども法師来い
ろ〜生西をくをあてざるべその青ぶぐ
里酒屋の門ろこ二年三月おるさう
ても呑ぬ酒よい酔ぬどう里いづる恐
ぶまふれまてげぶかりは私が口上より遣

す風吹きわよ病しきとごぐ〳〵べはひめうど
んで四歌いさう歌せう名代根元名代
〳〵「とれがひめうどんの蕎麦つく処と
見なせいおりろいよ」「ヨーらお主処ぐ
蕎麦や麦い蕎ぐんつきゆ〻ゆ見さくでも
どぐ〻れ〳〵○きとよあれおとうづく〳〵○せう
ゆう〳〵「ナぐ主れ〳〵よゆよおよくつは西
ろ〳〵並〳〵ふんぞり出なせ〳〵トおー合ゑー合てゆう
いくさいぜん名おの並ゆく

あんないの者いふところ〻〻小銭百五ぜーさいせんよなぐで
角せん蕎ふとする処をしろ〻〻つれて銭をとりそだ
百ごとさいせん「ヲてい出ゆ〳〵ぐ」ちっいトいなぐ〻ゆ
名れの中へおと　を合せておがむ
そとと〳〵此度寛帳しーする当像ゆ泰
ゆくも南猩家乃大日如来七宝殿福徳山
ゑい巻ちよあ亜一ゑる処の可福助神
慶迦羅火蛇天の化身なりとゑ二回の
産生奥のくるーこ敬とんぐ寿よ伝よ
福分といふ両敬二物の中冒と羅ゑひ

一代記孝をつくしたる事はあるべく人々の
知る処まして福神こづくり元祖を彫刻
せんとて名をあらはすまでの世の流生見ぐるしきの
者ふる程くさりて仏像を作りもひろ
こいなくも大あるべく福徳と長寿と
んのうへすりぬせるふはあるべきものて
いとうまつた神をもつて我んを
ぶーくもそよとのりう世にまさなる

処の三国無双たりこの尊像とゆへ
見あらりり人々福徳を願ん人のハ
我儀をまつりてたつ者をつくさんよおい
くいろくの願ひ願ひ願貴自在の守
とあるるるさふにうるびひなーとの御
せいぐるん、さびひ海をる事ハりのまく
大晦日のくんをまぬる福徳神者
ヨ心在のこうだとよやどりて当後ま

あふぎ四へびんがう神おそれをなして近
づく事あさまべく福徳濁世の利生を
こふむるべきこのなりつきんで能福の
むすだを山海さうう○安中方へ門ぢん
さふらひ参りまきちう○出出し除の
ぎりへ見より出ます○一まへ能福
能福新をてうぐいあくまきちう○
出いろうへたべく○見なる打出の

小槌と申へ福分神はまる毒まりつ
こいあくもげろうたの陰なりとまぐろう
ぶ悪人おしべ福分神さちまちさ
いづちある陰とありつむりのうちょう
光明をもつて待くの宝物をそう世
ひてたの悪人を教化しあふ処の宝
物なり○見なる名玉へむくしある者
者の宝義けうちょうて為なくうる

初めて光物出る人〳〵怪しるよりまづ
福神とし四時にそなふるぬんどをるぬん
びやうふ〳〵うまて〳〵おとし見ぬべきことを
世よりふ迄の金玉なり○色なる竹
乃子笠ひうやくきくも福神神いまぎ
折角とり時きよ流く雨の夜色なる
だつてう笠をうぶり長持をさげてとう
ぬと翼を出ぬ二すぢ四のいめんの

幸もかくすかくし小倉のごくまそうを
おとの化物なりとおひてしろうり切
うる者あり四角を笠ようして花さ
細竹をまぬうぬあふ傾笠とまスハ色と
○色なるかく笠蓑とまハ福神神ハか
さちハちハさくあるぬ大きくしてふせ
ぬふゆつもりうり蓑をハうぎりをひて
世の中代よりあるをうえずやぞ云ずと

これハちらし判なる縁起のことばハかく
ここのうれ名をかくさむもなしくて
鬼をはらる身なれバ衣笠内大臣の
御染筆なり○是なるハ心の鍵まへ
をはまじきさる君にさいわいをもたらす宝の
鍵なり○是なるハ黒枕ハ福神の御
夢枕と申て福徳神大に福あるが夢見へ
に枕もとにこそあらふ大きくなりてふせぬふ

是なるハてんぐその事ふ金の春く
ある人これひねのまさ志く見へて可ふ
幸つゆめ円位上人の染筆あり○是なる
名まハ福徳神我福徳守護の神と
なられたるにそ撞木を出中にたくへるが
たちまち一夜のうちに黄金の花咲ぬ
世よかしげる金のなる木と申ハ是なり
○内具宝へとふらつ守り夜着よう○

と言ふは福分神の福分神なおんつむりたり境いのたいよ
うつて肩より下へ柄のごくかそ〳〵ぶ
すなわち刑これ福分神ぬさち柄つきのうごくよ
表一ぬよ処のうつく南山貴一の宝物仏の
御かぐ〳〵と申するは色なりつきんて物
ぬ〳〵言ます〳〵「やしくみぐいとつてござる
「ト言てより中壹へ言て「どちそう茶かう〳〵ど

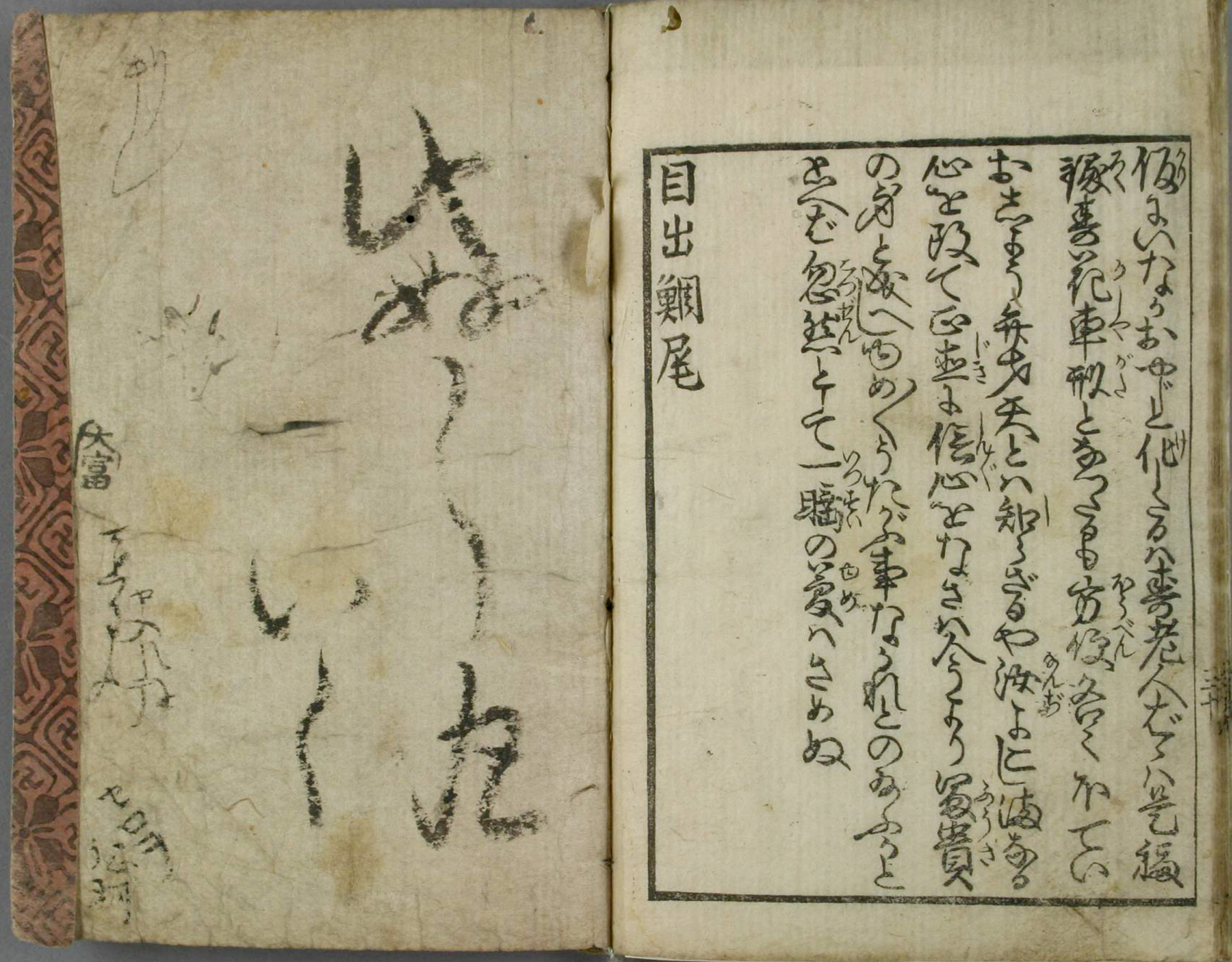
ぬう里ごふりとのまあすべい「人ときよ
あつぷされく汗をとき出一ぬた「ふきつ蔵
言言れ〳〵ぐめつ者のサおねさん血たいい
うの「さつきの園みぐきとふふ粉ごとり
でおさ陰り中たよ付よそれさあのあついう
ろぎて買て言ぬさ揚枝とあ〳〵ぐ年時
ようハあぐ〳〵どざるのうちうう孔角たるさ
ぞ大切は中スおれぬやうふぐどざるね

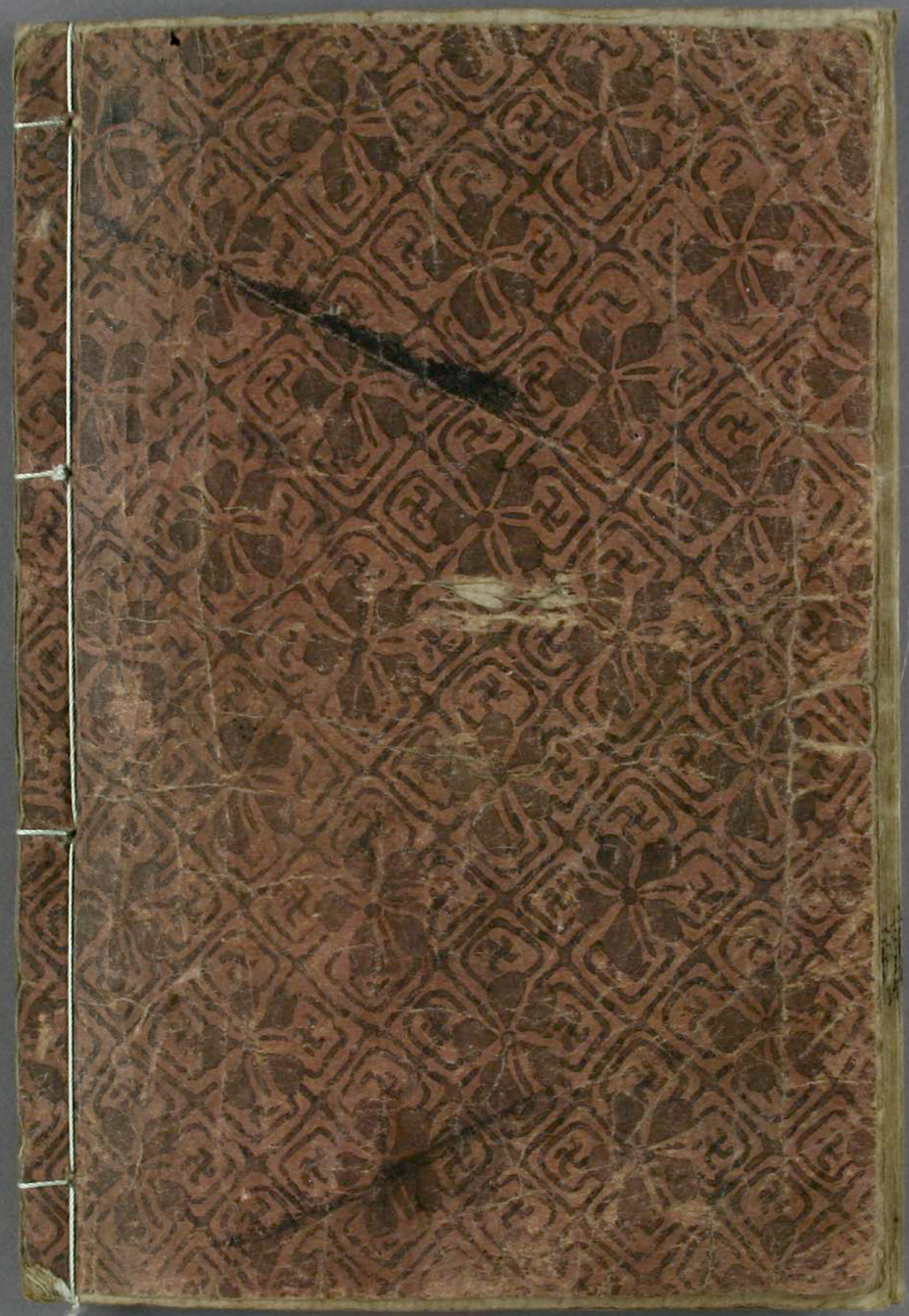
くらんげつぺう付まねをしてこゑをあんじ中
たりとふんまいがぬちまけはすべい「こうつハ
きて幸とふでゐもく「よりくみとて働く
だりがうをさいくれ「若ぐ心をあだやゑ
すまべい「宮のきどくあぐさく「こう
だつうい「おんあいあきくん恋いこゑいよ
めるきまうゑ村一番麦つき小町とあぐ
名をとつた女でござる氏都ゑもござるめく

「おんあいがとんだ化物りのぐおめく方が生ぬる
こんあ化物ゲナんゐるなゑもちつと実生ふゆ
こうこんぐの実ちよゑ世りのよするとゑく
狐のふぎだ「狐りゑ有ゑくこうえんが
おんぐ者「おもちよくん狐りふまとハ耳ろ
ぐね「おれだされ尚処へ活てる大蛇をりつ
てきてやとふだ「このつハ狐ゑいゑりてこち
まめく「ゑのふつくんでなもとゑもいまてこれ

る「とゝ」又どゝーて「されば」雲ついおらが
寺内の蓮池よ数年すんでる大蛇でござる
ぐ先月大々古の日雲をまいて天上
ようゝとて飛さたづて おらが居宿へおつこち
とのうち雲いたれる大蛇いまごつきとべよ
あるとい飛きの中へと今て今よく出てねもす
「といつとといふきをのどくとあり申すう「いる
ともく大蛇も水けがなくくたちやぎ

雲がおりるのとゝつてへおりく来を出さぢやと
時くといふ元の中て蛇のせきぐひがとる「ゐん
よう〳〵「ゐん」べさたどこをのむとけむを雲らとお
もつて大蛇が出おぐ〳〵ふせてゴボン〳〵「ゐん」お
ちようさまへ噛ぢようあとんざちやじやうすぐ
扱いおう者 とゝ偽りおゝを一寸あとんさのぐ
な「よきうのやく〳〵」汝我こをいなう者と数り
形路よ案内去る不便さる吾乃よ尊ぐんがる



仏もよいなうおやぢと仏つくるハ夢老人だつハ芝編
猴喜花車祝とあつる由方便ゆゑくわてい
おさまり弁才天といハ知ぬるや汝よ巨海ある
心を改て正直よ信心をなさハ人うつり冥貴
の身と成へ西めくらうたぐふ事なられとのあふと
さへぢ忽然とて一瞬の夢ハさめぬ

目出鯛尾